

ただいま、ご紹介いただきました早稲田大学の店田と申します。本日は、福岡マシジドのオープニング・セレモニーにお招きいただき、こうしてお話しする機会を賜り、御礼申し上げます。先月中旬に訪問させていただいた折に、地階から3階まで案内していただきましたが、このような素晴らしいマシジドが開設されるまでには多くの方々のご苦勞があったことと思います。福岡や近県にお住まいのイスラーム教徒の方々をはじめ、全国各地のイスラーム教徒は言うに及ばず、海外のイスラーム教徒や関係機関からも多大なご協力があって、長年の夢を実現されたことに対して、心からの敬意を表したいと思います。

さて、本日、私に与えられた課題は、日本のムスリム・コミュニティについて語ることですが、きょうは特に日本のなかでの福岡マシジドの可能性や将来の展望も考えながら、お話ししていきたいと思います。

日本に本格的なモスクが設立されたのは、ご存じのように1935年（昭和10年）のことで、神戸モスクが日本で最初のモスクです。その後、1936年に名古屋、1938年に東京と、戦前に3つのモスクが造られました。これらモスクの建設に重要な役割を果たしたのは、インド系商人のムスリムやロシア革命後にソ連から亡命してきたトルコ系のタタール人たちでしたが、この当時、日本にいたイスラーム教徒の数は数千人程度であったとされています。

1930年代後半から1945年の終戦までの時期は、欧米列強と対抗した当時の日本が、国策としてイスラーム重視政策を掲げていた時期でもあり、モスク建設を後押ししたということもありました。また、日本におけるイスラームに関する研究の第一のブームといわれるほど、当時は回教と称されていたイスラーム研究が盛んに行われ、回教圏研究所や大日本回教協会、イスラーム文化協会、満鉄の東亜経済調査局や外務省でも回教研究班が作られて、活動していました。しかし、このようなイスラーム研究も日本の敗戦で衰退を余儀なくされました。しかし、現在では、私たち早稲田大学の研究グループを初め、多くの大学や研

究機関が、イスラームやイスラーム教徒の研究に取り組むようになり、新たなブームが起こりつつあります。

ところで、日本には、どのくらいの数のイスラーム教徒の人たちが住んでいるとお思いでしょうか。日本に住む外国人の数は、1990年頃から、外国人労働者の来日とともに増加し、在日イスラーム教徒の数も徐々に増加してきました。イラン・パキスタンなどからの入国者は、出入国管理政策の改定により一時に比べ激減しました。しかし、その後、研修、留学等の資格によるインドネシアなどからの入国者が増加し、全国各地の大学で学ぶムスリム留学生の増加と、外国人ムスリムと日本人との婚姻による改宗者の増加などもあって、在日ムスリム人口全体としては増えつつあります。

日本の政府機関（入管協会）が発行している在留外国人統計を利用して推計してみると、2006年末現在の登録外国人数208万人のうち、およそ10万人が外国籍のムスリムであると推計され、更に日本人ムスリムなどを加えると11万～12万人のムスリムが日本に在住していると考えられます。現時点では若干増加しているにしても、ほぼ同程度の数のムスリムが住んでいるものと思います。これは日本の全人口の約0.1%に相当しますが、ヨーロッパの先進諸国におけるムスリム人口比率に比べれば、一桁少ない比率です。一方、礼拝施設としてのモスクは、毎日の礼拝、とりわけ金曜日の集団礼拝に使用される宗教施設であるとともに、ムスリムにとっては「コミュニティ」の拠点ともなっている施設であり、2009年3月現在、日本各地におよそ60カ所近いモスクが開設されています。もっとも新しいモスクは、2009年3月15日に完工したこの「福岡マスジド」です。

早稲田大学では、日本における多民族・多文化共生のあり方を考えていくために、日系ブラジル人や中国人ほどには注目されてこなかった在日ムスリムの研究を始めました。日本では人口の僅か0.1%を占めるに過ぎませんが、世界のイスラーム教徒は、世界人口の20%以上を占めており、日本人との接触もこれから頻繁になると考えられることも理由のひとつです。一方で、日本にとっては欧米の国以上に、イスラームは異質の宗教や文化であり、共存することについての障害も多いとも言えることから、在日ムスリムを対象とした調査は重要

と考えております。

これまで、日本とイスラーム社会は、比較的良好な関係を維持してきましたが、日本社会のなかにイスラーム教徒のコミュニティが出来上がり、日本人との交流が本格的に始まり関係することが多くなった場合に、地域社会での摩擦や軋轢がおきないとは言えないと思います。お互いが、双方の文化や生活の歴史を認め合い、価値観や宗教を尊重してこそ、日本社会の中でも良い関係が築けるでしょう。そこで、多民族や多文化が共生する地域社会のありようとはどのようなものかを考えるためにも、在日ムスリムの研究を、早稲田大学は始めています。

まず、在日ムスリムの生活は、また人々の意識はどのようなものかを調べました。いくつかの調査で分かったことを列挙すると、出身地は東南アジアが4割、西アジア・アフリカ3割、南アジアが3割でした。職業は、専門職や自営業が比較的多いようですが、3分の1近くは、学生でした。留学生の場合は、短期滞在が多いのですが、仕事に就いている人の場合、在日年数10年以上の人も約3割を超え定住化の傾向も窺えました。週1回以上モスクに行く人が半数を超え、日本人の友人も10人以上いる人が半数でした。日本社会での生活に多くの人が適応し、生活満足度も比較的高いこと（80%が満足）が調査結果からは明らかとなりました。

また、子どものいる家族として生活しているムスリムを見ると、子どもの数は2人程度、7割以上の方が家族の暮らし向きは良いと回答し、他方で、学校教育に関してはイスラームの食の規範を守るために給食に関する悩みが多く見られ、他に授業内容や学校側の理解に関する不安があげられていました。モスクにイスラーム教育の機能を期待する意見が強いこと、またコミュニティの要として相互扶助や友人との交流の場という役割も期待されていることが窺えました。この調査でも生活満足度は80%を越えており、在日ムスリム家族の生活も現状では安定しているといえましょう。

これまでのところ、地域社会での大きな問題は起きていないようですが、イスラーム教徒のコミュニティと、日本人コミュニティが、本格的な交流や接触を始めていないためとも言えます。とくに外国人イスラーム教徒の場合、自分

たちだけのコミュニティに閉じこもる傾向がまったく無いわけではありません。しかし、福岡モスクが建設される際には、サフトさん、中村さん、エコさんをはじめ、多くのムスリムの方々が、自治会長さんやご近所の方々をはじめ、荒巻さんなど警察の方々とも話し合いを続けたと聞いています。お互いが努力をして、このモスクは完成したのだと思います。その経緯からも、このモスクは景観にマッチした建物の外観そのままに、地域の中に、ハード面でも、ソフト面でも、溶け込んでいくのではないかと期待している次第です。

私たちも、箱崎で実践されてきたような交流や話し合いが大切であるという思いから、全国のモスクの代表者に集まってもらい、日本社会におけるイスラームの現在と将来について語ってもらうという、第1回モスク代表者会議を2009年2月に早稲田大学において開催しました。残念ながら、福岡モスクの代表者は参加できませんでしたが、この会議は、日本で初めてモスク代表者が集う会議となり、イスラーム教徒にとっては、各地の抱える問題を話し合い、新たなネットワーク形成の契機にもなったと思います。しかし、この会議でも頻繁に取り上げられたのは、周辺住民や地域社会とどのように協働していくのか、相互理解をどのように進めるのか、でした。

そこから感じられたのは、日本人の宗教や生活文化をイスラーム教徒の側が理解すること、イスラーム教徒の宗教と生活文化の有り様を日本人が理解すること、双方が歩みよると同時に、日本人が臆することなく日本社会での生活のあり方について積極的に助言すること、などです。また双方の仲介役とも言えそうな日本人イスラーム教徒が、日本社会における「共存や共生」を実現できるように、イスラーム教徒のコミュニティの中で、積極的に活動することも必要と思われました。

在日ムスリムの多くは日本社会に適応し、生活満足度が比較的高く、生活基盤も安定してきたことから、在日ムスリム・コミュニティが成熟期に入りつつあると言えます。このことが、近年のモスク建設ブームとなって表れてきていると考えられます。¹ 1980年代末までの日本にはモスクは僅か4ヶ所（ただし、うち1ヶ所の東京ジャーミイは1986年に取り壊され、2000年

¹岡井宏文「イスラーム・ネットワークの誕生」、樋口直人・岡井宏文ほか共著『国境を越えるー在日ムスリム移民の社会学』青弓社、2007年10月、178-209頁。

に再開)のみでしたが、1991～2000年に14ヶ所、2001～05年には15ヶ所、2006年以降には、20ヶ所が一気に新設されました。2009年3月現在、北海道の小樽や札幌から、福岡や大分県別府まで52ヶ所のモスクがあり、われわれが未確認のものを加えると60カ所近くに達しています。この福岡マスコは、これらモスクの中でも、神戸、東京に並んで、立派な外観と設備を持った礼拝施設として、地域に溶け込んだモスクとなる可能性があると思われます。

このように在日ムスリム人口の定住化が進み、生活も一応安定してきましたが、一方で在日ムスリム・コミュニティは、子どもの教育、将来の墓地確保問題も抱えています。2008年7月の岐阜市では、500人程の在日ムスリムが参加して、岐阜モスク開所式が執り行われ、わたしも参加させていただきました。地域社会の人々にとって見慣れた田園風景の中に、純白のモスクが同居している風景のコントラストは、日本社会と在日ムスリム・コミュニティが取り組むべき課題を象徴しているようでもありました。2009年3月には、同モスクを再び訪問しましたが、地域との交流や関係強化の取り組みは当初の意図通りには、進んでいないように見受けられました。今後も在日ムスリムは増加し、モスクの新設も続くと予想していますが、ムスリム・コミュニティ全体から見ると、日本人や地域社会との交流や関係づくりは、そのスタート地点についてどころです。その観点からも、福岡マスコが、設立の理念や地域との交流をどのように維持し発展していけるのか注目されるところです。

モスク代表者会議において、ある代表者が、「郷に入っては四に従え」と発言していました。本来は、「郷に入っては、郷に従え」といいます。英語では、**When in Rome, Do as the Romans do.**あるいは、**Do in Rome as the Romans do.**にあたります。皆さんご存じの通り、「人は、住んでいる土地の風俗・習慣に従うのが良い」という意味ですが、この日本のことわざを少し言い換えた発言でした。少し説明しますと、郷というのは土地と言う意味ですが、これを数字の5という意味でも使っています。つまり、「住んでいる土地の風俗・習慣が、5、あったとしたら、そのうち、4は、従った方が生活はうまくいく」という意味で、「郷に入っては四に従え」と言ったわけです。

私には、在日ムスリムの側から、日本社会に積極的に適応していこうという

覚悟のように聞こえました。もちろん、宗教や文化などイスラーム教徒として譲れない部分はあるにしても、日本社会への適応を強調した言葉であったと思います。イスラーム教徒のコミュニティを含めた日本の地域社会における多民族・多文化共生には、まだまだ多くの課題を解決する必要があります。早稲田大学でも、日本人コミュニティから見た「イスラーム教徒のコミュニティ」、日本人コミュニティから考える「共生や共存」のあり方をテーマとして研究していきます。

他方で、日本社会において、イスラーム教徒のコミュニティが地域社会と共存していく可能性を探ると同時に、これからも日本社会とイスラーム社会との良好な関係を維持し、発展させることは、ムスリム・コミュニティ、とりわけ、この福岡モスクにかせられた課題と言えるように思います。

これからの福岡モスクと地域社会との交流を通じて、この地域が日本社会とイスラーム社会の共生を実現するモデルとなることを祈念して、私のスピーチを締めくくりたいと思います。

ご静聴、ありがとうございました。